椙山女学園大学大学院教育学研究科 修士（教育学）学位論文要旨
Summary of Master's Thesis: The Degree of Master of Education, Graduate School of Education, Sugiyama Jogakuen University

児童がのびやかに歌うための指導法
――リズムの体感による発声の変容に着目して――

山本　朱莉（教修第003号，学籍番号：C14DA003）

はじめに

歌を歌うことは，本来人間にとって心を豊かにし，解放し，喜びを感じるものである。歌唱が，学校教育において音楽科だけではなく，学校行事や学校生活の中で取り入れられているのも，歌うことが子どもの育成に成果をもたらすからである。歌唱指導において重要な点は，音楽に込められた感情や情景，イメージなどを児童自身が感じられるように導き，端的でわかりやすい適切な指導のもと，児童たちに歌う喜びを味あわせることであると考える。

そこで筆者は，音楽の3要素の1つである「リズム」に着目した指導を試みたい。なぜなら，音楽の感得に最も有効な手段がリズムを体感させることであるとされ，筆者自身もそのことを強く感じるからである。そこで旋律線を作り出しているフレーズリズムに着目し，そのリズムを体感しながら歌うことで，のびやかな歌唱へと導くことができるのではないだろうかと考える。

目的と方法

本研究の目的は，リズムの体感による発声の変容に着目し，実践・検証を行うことを通して，具体的にどのような変容がみられたのかを明らかにし，歌唱指導の方法の一つとしての有効性を明らかにすることである。

第1章では，日本語における歌唱曲の特徴について発声，発音，言葉と音楽の関係という視点から明らかにする。第2章では，リズムと音楽の関係性を明らかにし，学校教育におけるリズムの体感を取り入れた歌唱表現のプロセスを構図化させる。第3章では，第1章，第2章によって明らかとなった，日本語の音楽の関係性とリズムと音楽の関係性をふまえ，「リズムの体感による発声の変化」についての実践計画を立て，実践し，どのような発声の変化がもたらされたのかの分析を行う。

研究結果と考察

マーセルの論から，リズムの体感を用いた歌唱表現のプロセスを次のように示した。

① 楽曲をうたう

・範唱と共に歌う。

・リズムを手拍子によって体感する。

② 音楽のリズム的要求を知る

・フレーズリズムの体感

・フレーズリズムを感じながら歌う。

③ 音楽へ還元

・歌唱の技能（声の調整，発音，発声等）

・感じたものを声によって表現する

①～③の段階を踏むことによって，歌唱表現として成立するとしている。このことから筆者は，旋律線に存在するリズムを，基本リズムパターンとし，それを体感させることによって発声に変容がみられるのではないかと仮説立てた。小学校第4学年の児童60名と音楽専攻の学生20名の実践結果を踏まえ，リズムパターンを直接的に体感しながら歌うことによって生じた発声の変化を整理すると，次の5つに分類された。

① 発音への意識と明確化――それぞれの基本リズムパターンのアクセントによって，子音が際立ち，言葉1つ1つが明確に発音されるようになったと考えられる。また，歌詞の始まりが弱拍にあった場合も，言葉へ意識が向き，伝えようとする様子がみられた。以上から，基本リズムパターンのアクセントによって発音が明確になったと考えることができる。

② 発声の変化――基本リズムパターンが体の動きや心情と結びついたことによって，楽曲をイメージすることができ，それに伴って発声の変化がうまれたと考えられる。

③ 音程やリズムの把握――旋律線の中にある基本リズムパターンをもちいることによって，楽曲のもつリズムの習得が容易になった。また，基本リズムパターンのもつ動的なエネルギーによって，フレーズの躍動感が最高音へ到達することを容易にしたと考えられる。

④ 曲想や楽曲のイメージの把握――それぞれの基本リズムパターンの連続によってうまれるエネルギーが内面に訴えかけ，曲想や楽曲のイメージをより明確に把握することへつながったと考えられる。

⑤ 表現への衝動と学びの可能性――それぞれの基本リズムパターンを体感することで，情景やイメージを言葉によって表現した。“そのように歌ってみよう”と声をかけることによって表現しようという意欲がうまれ，強弱をつけようとしたりするようになった。基本リズムパターンによって楽曲のイメージを把握することができ，指導者の言葉かけによって表現しようとしたと考えられる。また，その発言の内容によっては，学びとしての可能性が含まれていることがわかった。

今回の実践において，基本リズムパターンの体感によって児童が表現しようとする

姿までは見ることができたが，本当の音楽表現として成立するところまでは辿り着かなかった。その要因は，短い時間の中で，4 曲の教材を取り扱ったためであると考える。1 曲にかかる時間が短く，どのように表現したらいいかを考えさせ，実際にやってみる時間を十分に取ることができなかったと推察する。時間を十分にとり，歌声の変化を実感しながらさらに高い表現へ導くことが重要であると考える。このことは，今後の自身の課題としていきたい。また，基本リズムパターンを感じて表現された児童の発言は，音楽の形式や用語を教えるきっかけとなることも分かった。児童のつぶやきや発言を拾い上げ，音楽の知識として伝えることで主体的な学習へつなげることも可能だと感じた。これは指導者の授業力と音楽能力の有無に関することだと感じた。このような力を身に着けていくことが，筆者自身の今後の課題となると実感している。

おわりに

本研究を通して，音楽を教えるのではなく，音楽の魅力を感じさせるように導いていくことが指導者に求められていることであると強く実感した。実践結果から，リズムパターンの体感によって主体的に音楽を感じ，歌唱することができたといえる。今回の結果をふまえ，今後の学校教育における歌唱活動の指導に活かしていきたい。

指導教員：植松　峻 教授

主査：宮田俊雄 教授
副査：植松　峻 教授
副査：浪川幸彦 教授